万葉の花物語

MANYO NO HANA MONOGATARI

古代、人は森羅万象の中に人々の営みを見ていました。自然はただの自然ではなく、人々の思いを映す鏡でもありました。人々の活動のすべてが自然の中にあって、自然とともに生きていたといえます。

花は、ただ植物でわたしたちの目を楽しませる美しい花というだけではなく、生命がきざしてくる様相をかいま見せてくれる存在だったといえます。

万葉集には数多くの花や植物が歌われていますが、これはただ景物として歌ったということではなく、花の姿を通して心を表現したのです。万葉の人々の思いや暮らしが見られるのです。

大和を彩る万葉の花々

◆万葉の花・大和の花

万葉集は古代の人々の歌を集めたものですが、ここにはいろいろな植物や花が歌われています。それらの花や植物を万葉の花といいます。多くは当時の大和の野山に咲く花であったようです。

そして歌われた花には、比較的地味な花が多く、自然の中で人知れず咲いて、散るというものだったのでしょう。なかには花とは呼べない雑草や山菜のようなものまでありますが、自然の中で生きていた人々としては、当然のことだったのでしょう。鑑賞用、薬用、食用、染料、儀式用とさまざまな用途の花があります。

素朴な花、可憐な花、大和の山野に咲いていた花から古代の万葉人の心を感じてみたいものです。

◆ふたつのアサガオの花

万葉集に歌われた花々は、現在、わたしたちが呼んでいる名称とは違うものが多くあります。

アサガオもそのひとつで、四つの植物が万葉集に詠まれたあさがほ(阿佐加保)ではないかといわれています。それはキキョウ、ムクゲ、アサガオ、ヒルガオ。

なかでも現在わたしたちがキキョウ(桔梗)と呼んでいる花こそ、万葉の花・あさがほという説が最も有力といわれています。

「朝顔は　朝露負ひて　咲くといえど　夕影にこそ　咲きまされけれ」　巻十―二一〇四

濃い紫のキキョウはりんとした美しさのある花。最近では白いものや八重の園芸種がありますが、キキョウといえばやはり紫。

「萩が花　尾花くず花　なでしこの花　女郎花また藤袴　朝顔の花」　巻八―一五三八

山上憶良が秋の七草を託した歌から考えると、キキョウこそがあさがほにふさわしいと思えます。

しかし、ムクゲもまた歌にふさわしい花といえるようです。ムクゲは夏から秋にかけて咲く花で、かよわいイメージのある花。それは朝に咲くともう夕べにはしぼんでしまうからで、命のはかなさを感じさせる花です。薄紙のような花びらが、夏の朝露を浴びて咲いている姿はとても美しいものです。

◆秋の七草とハギ

山上憶良の七草の歌の冒頭に、ハギの花が出ていますが、ハギは万葉集の中でも最も多く歌われた花です。それだけに秋はハギの花から始まるとされて、人々はハギの花をいつくしむことを知っていたのです。

「大夫の　呼び立てしかば　さを鹿の　胸分け行かむ　秋野萩原」　大伴家持　巻二十―四三二〇

ハギはマメ科の植物で、「芽子」、「波疑」などと書かれています。万葉集に歌われているのはヤマハギ。そして、鹿などとともに歌われて秋の風趣を表しています。

「秋風は　日に異に吹きぬ　高円の　野辺の秋萩　散らまく惜しも」　巻十―二一二一

たわんだような細い枝に小さな花をたくさんつけたハギは、秋の初めにふさわしい繊細な風情の花といえるでしょう。

◆高貴な花とされたフジ

「春日野の　藤は散りにて　何をかも　御狩の人の　折りて挿頭さむ」　巻十―一九七四

「藤波の　花は盛りに　なりにけり　奈良の都を　思ほすや君」　大伴四綱　巻三―三三〇

フジは古代の権力者・藤原氏のシンボルでした。この時代にはすでに奈良の都、とくに春日野はフジの花名所となっていたようです。

藤波とはフジの花が波のように揺れる様を動的に表したもので、そこには美しい比喩が見られ、日本人の繊細な感性が感じられます。

◆衣を染めた花々

「杜若　衣に摺りつけ　大夫のきそひ猟する　月は来にけり」　大伴家持　巻十七―三九二一

このように詠まれたカキツバタには、アヤメ科のカキツバタ、ノハナショウブなどが当てられています。この歌にあるようにカキツバタは衣に染め付けた染料の花として用いられたとされています。このように花を擦り付けて染料とした花には、他につき草と呼ばれたツユクサなどがあります。

しかし、染料の花といえばベニバナのことが思い出されます。

ベニバナはくれない草の花を摘み、灰汁で色素を出して酢によって発色させるものです。万葉の時代には大和をはじめいろいろな土地で栽培されていたといわれます。染料としてとても貴重な花であったといいます。

「くれなゐの　深染めの衣　色深く　染みにしかばか　忘れかねつる」　巻十一―二六二四

「外のみに　見つつ恋せむ　紅の末摘花の　色に出ずとも」　巻十―一九九三

このベニバナはキク科の花で原産は遠くエジプトといわれています。それがシルクロードを通り、中国から日本へと伝わってきたとされています。古代の絹製品などに用いられ、藤の木古墳の被葬者を覆っていた布にはベニバナが使われているといわれています。

紅(くれなゐ)と記されるが、先端から咲く花を次々と摘んでいくので、末摘花とも呼ばれていました。花の黄色からは想像もつかない鮮やかな紅色が生まれます。

◆アジサイとハス、ネム

現在、アジサイは紫陽花と書かれます。いかにも爽やかなイメージのある花の名です。しかし、万葉仮名では「味狭藍」、「安治佐為」などとなっています。

「紫陽花の　八重咲く如く　弥つ代にを　いませわが背子　見つつ偲はむ」　橘諸兄　巻二十―四四四八

梅雨の時期に雨にうたれて咲くアジサイはとても日本的な花ですが、それもそのはず日本原産の花なのです。江戸時代に長崎にきてシーボルトが世界に紹介したことが知られています。「手鞠花」や「七変化」などという名称は、その球形の形や花の色が変化することから付けられました。現在、鉢植えなどに良く見られるのは西洋アジサイという園芸種。

スイレン科のハスは蓮(はちす)といわれていました。これはハスの実が入った花托が蜂の巣に似ているところからきています。そして、水面に出て大きく葉を広げ、その上に水玉が弾けるように乗っている様は万葉人も同じように観察しています。

「ひさかたの　雨も降らぬか　蓮葉に　溜まれる水の　玉に似たる見む」　巻十六―三八三七

ネムノキはマメ科の植物です。合歓、合歓木と書かれ、ねぶと呼ばれました。

「昼は咲き　夜は恋ひ寝る　合歓木の花　君のみ見めや　戯奴さへに見よ」　紀女郎　巻八―一四六一

梅雨から夏にかけて山野に咲くネムの花。樹木の梢に咲くから、遠くから見るとボウッとしているように見えます。近づいて良く見ると、綿毛のような細い花びらが根元は白く、先へいくほど紅色に変わっています。どこにでも見られる花です。

写真提供／橋本 健次